

事例1:「幼虫を育てよう」 4・5歳児混合(5月)

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
(10の姿)との関連

- ②自立心
- ⑦自然との関わり・生命尊重
- ⑨言葉による伝え合い

これまでの姿

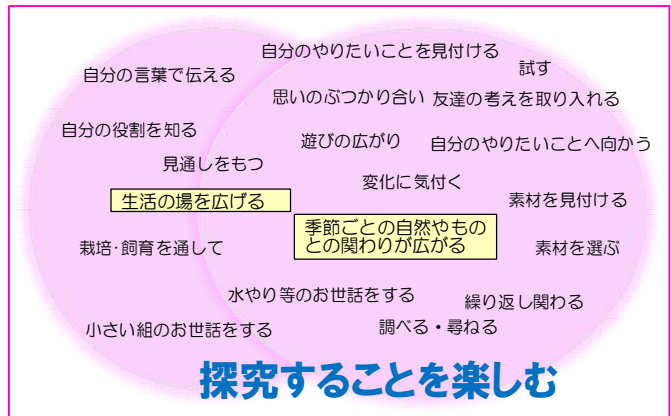
・園庭のパンジーにいた幼虫を捕まえたA児は、友達と名前を調べ、エサを探そうとした。そこで、保育者が摘んでよい葉や花を一緒に選び、飼育ケースに入れようとする、近くのB児は「葉っぱは水に挿すといい」と教えるなど、子供同士、幼虫やその成長に興味をもって関わり、飼育する活動が始まった。

◎ねらい◎内容

◎身近な動植物に興味をもって関わり、友達同士捕まえたり飼育してみたりして、生命の不思議さや大切さを知る。

- 身近な生き物を見付け、飼育しようと友達と本で調べたり、飼育方法を工夫したりして、世話する。
- 友達と身近な生き物に触れ、言葉で感触などの気付きを伝え合う。

架け橋期のカリキュラムとの関連
(遊びの中で経験させたいプロセス)



遊びの様子(番号:10の姿との関連)

保育室にコーナーを作り、ツマグロヒョウモンの幼虫の飼育を始めると、虫が好きな幼児が、②「先生、エサ取りに行こう」と毎朝声を掛けて来たり、園庭に出ては幼虫探しをしたりするようになった。やがて、保育室に幼虫の仲間がどんどん増え、最初は怖くて触ることができなかった幼児も、⑦自分の手や腕の上を少しずつ這う様子を嬉しそうに見つめたり、くすぐったい感触を楽しんだりしていた。次第に⑦⑨友達同士で幼虫に触れて見比べる姿も見られ、「こっちはしましまくん」「これは角みたいに頭がとんがってかっこいい」など、色や形の違いを見付け合って楽しんでいた。

⑦家で調べて来たA児の「さなぎから水が出たからもうすぐチョウになるよ」の声で、運良く羽化の瞬間に出合えた日には、みんなで真剣に見守った。その後も、「羽がまだ乾いてないから、置いてあげないといけないんだ」というアドバイスで、しばらく休ませてから、昼、元気に羽ばたくチョウを見送った。

★環境の構成

○保育者の関わり

★虫を見つけたら、どんな虫か調べ、観察や飼育ができるように、保育室に飼育ケースや虫かご、虫眼鏡、絵本や図鑑を用意しておく。

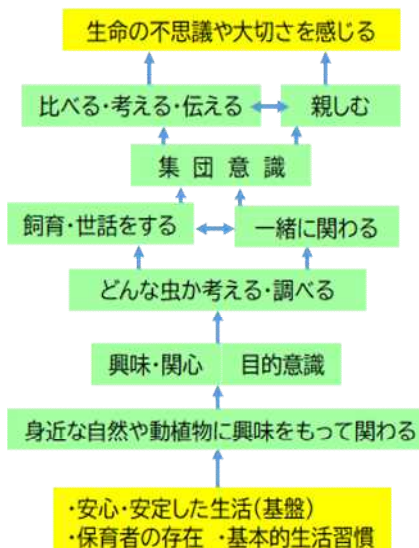
○子どものつぶやきや気付きなどを受け止め、周りの子どもと共有できるように言語化することで、子ども自ら表現できるようにする。

★さなぎから羽化する虫の様子をじっくり観察できるよう、時間にゆとりをもって遊べるように計画しておく。

○幼児の経験からくるつぶやきを生かしながら、生き物の不思議さに驚き、生命の大切さを感じられるよう言葉で意味づける。

遊びや学びのプロセス(10の姿)

「幼虫を育てる」活動のプロセス



②自立心

みんなで育てることにした幼虫やその環境に興味をもち、エサや仲間の幼虫を見つけにいこうとするなど、主体的に関わろうとしている。



⑦自然への関わり・生命尊重

身近な生き物を飼育したり、飼育するのを見て触れるなど、好奇心をもって関わる中で、生命があるものへの愛情を感じ、大切にしようとする気持ちを持っている。



⑩豊かな感性と表現

チョウの羽化の場面に出会うなど、心を動かす出来事に触れ、感性を働かせる中で、虫の気持ちになって成長の過程を楽しんでいる。

⑨言葉による伝え合い

幼虫の色や形、動く様子に興味をもって言葉で表現したり、友達の表現を注意して聞いたりしている。また、気付きに共感したり、違いを受け入れたりして、友達との伝え合いを楽しんでいる。



小学校教員の気付き



◆園の遊びや環境づくりにより、長い期間で羽化までを体験的に学んでいることに驚いた。

単に飼育することを教えるだけでなく、親しみや愛着といった心の動きを大切にしていきたい。

◆幼虫やエサへの気付きから、飼育の環境を共に作ったり関わりを認めたりして、主体的に生き物に関われるよう環境を工夫していた。幼児期の経験を引き出せるよう、今まで以上に児童に投げかけたり、思いを聞いたりしながら、主体的に学べる環境を作っていきたい。

保護者への発信ポイント



◆飼育ケースを、廊下やテラスなど、保護者も見えるところに置くことで、幼児の興味や生き物との関わりを知ってもらうことができます。送り迎えの機会を捉え、幼児の発見などを伝え、我が子のよさに気づくことで、子育ての楽しみにつながられるといいですね。